

=====

CONTENTS

- 卷頭言
- 野沢豊先生をしのぶ
- 事務報告
- 役員体制（2010 年度・2012 年度）
- 日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌
- 地域部会活動報告
- 2010 年度学会スケジュール（予告）

=====

【卷頭言】

日本現代中国学会の存在意義を考える

理事長 瀬戸宏（摂南大学）

今回多くの方々、特に佐々木信彰前理事長の強いお勧めと推薦により、日本現代中国学会理事長を務めさせていただくことになった。極めて微力なので、会員の皆さまのご支持、御協力を切にお願い申しあげたい。

これを機に、また一昨年来『資料・日本現代中国学会の 60 年』を編集していることもあり、学会の在り方について改めて考えることが多かった。

四月刊行予定の『資料・日本現代中国学会の 60 年』をみれば理解していただけると思うが、1951 年の創立から 1979 年頃までの約三十年間、現代中国学会（以下、現中學會と略記）にはかなり強い傾向性があった。これは、当時の中華人民共和国の姿勢と日本の社会状況によってもたらされたのである。しかし現中學會は學術団体としての性格はあくまで保持していた。そのため 1966 年からの文化大革命の影響で現中學會と同傾向の研究・交流団体が次々に分裂していく中で、現中學會は分裂することはなかった。この歴史は、誇りとすべきであろう。

その後、中国の変化に伴う現中學會内の実証研究重視と中国研究者人口の増大で、1980 年代以降、現中學會の会員数は増加を続けた。80 年代初期には 300 人程度だった会員数は、今日では約 700 名に達している。現中學會は現代中国に関する総合的学会として、大きく発展しているといっている。

しかし、現中學會を取り巻く問題も多い。現中學會の周辺には、後発の専門別に細分化された中国関係学会がいくつもある。大学を単位とする政府関係の大型学術助成もある。このような中で、現中學會の存在意義がぼやけてきているのである。この問題にどう対処したらいいのだろうか。

第一に言えることは、学会は研究者の自発的な交流の場であるから、何よりも会員の参加・研究発表意欲を促す円滑な学会運営に努めることである。理事長はじめ学会役員は、まず会員への奉仕者の立場で学会運営にあたらなければならないと思う。

今日、現中學會が一つの自覚的傾向性を持つことは難しい。中国の姿勢が変わっただけではない。中規模学会に発展した現中學會は、現代中国に対して各分野のさまざまな考えをもつ研究者が集まるゆるやかな集合体になっており、それを特定の傾向性、方向性でまとめることが困難になっているのである。

そんな中で、会員が学会の必要性を感じ失望感を持たないためには、現中學會が学術団体として正常に運営されることが、まず必要であろう。当たり前のことのようにだが、これまでの経験では、これ自体が相当な努力を必要とするのである。

第二に、現中學會の存在を内外にアピールする企画も定期的に考えていく必要がある。2009年に刊行した『新中国の60年—毛沢東から胡錦濤までの連続と不連続』（創土社）や四月刊行予定の『資料・日本現代中国学会の60年』は、このような意図をも込めて企画されたものである。学会の存在感を示すことが、会員の参加意識や成果発表意欲を高めることも、事実であろう。

第三に、現代中国に関する総合的、学際的学会という現中學會の特徴をいっそう強めていくことである。それには、全国大会の共通論題や時々のシンポジウムなどの内容設定が重要になってくる。

ここで現中學會が文学芸術を研究分野に含んでいることの意味を考えてみたい。中国を対象とする地域研究の学会は他にもある。しかしそれらの学会と現中學會との間には、実は大きな相違がある。現中學會は文学芸術を対象に含むが、他の地域研究学会はそうではないのである。現中學會がなぜ文学芸術研究を含むかは学会の成立過程を考えれば答えは出るが、この点は今は触れない。現中學會は1957年第6回大会、1966年第16回大会と二回にわたって魯迅をテーマとする共通論題を開催してきた。作家が共通論題の主題となることは、中国関係の他の地域研究学会では考えられないことであろう。

残念ながら文学研究者自身も含めて、現中學會が文学芸術研究を含む意義が学会内であまり感じられていないようにみえる。共通論題が半日に圧縮されたためもあるが、全国大会共通論題から文学芸術がはずされることが近年多い。それに対する不満の声もあまりあがらない。

一つには、日本・中国に共通する文学の地盤沈下があろう。現代中国文学芸術が、魯迅以後世界的影響力を持った作家・芸術家をあまり産み出せていないこともあげられよう。さらに、私を含めて現代中国文学芸術研究者が他分野の現代中国研究者の関心をかき立て

る研究を行い得ているか、という問題も指摘されなければならないであろう。

学会だけでなく、現代中国に関する政府大型学術助成でも文学芸術研究が外されている場合が少なくない。だが、文学芸術が多くの現代中国研究者の視野に入らない現状は、はたして好ましいことなのだろうか。現代中国人の魂と感情の表現に対する洞察を欠いた現代中国研究は、私にはどこか脆さが感じられる。

現代中国の総合的・学際的学会としての現中學會を今後どう発展させていくか。すぐには答えの出ない問題ではあるが、これから二年間私なりに模索していきたい。

【野沢豊先生をしのぶ】

我が恩師・野沢豊先生を偲ぶ一遺文に見る孫文・辛亥革命への最後の思い

姫田光義（中央大学名誉教授）

さる10月26日、本学会の創設期のメンバーであり私にとってはたった一人の恩師ともいべき野沢豊先生がご逝去された。享年88歳。辛亥革命と孫文の研究では国際的にも第一人者といえる方であるが、教育面でも東京教育大学の助手から始まり都立大学、中央大学、駿河台学園大学などを歴任、多くの研究者を育てられた。また『近きにありて』という研究誌を刊行して日中間の学術交流と若手研究者の育成にもご尽力なさってこられた。偉大な研究者・教育者ではあるが、そのお人柄は誠に謙虚で名利にうとく、昨09年春節前後に病床にあつて書かれた遺書とも思われる一文の中で、「無名の戦士」として「お決まりの行事」はやらないようにと書かれており、ご遺族はそれに従ってお通夜もご葬儀もごく内輪のものになされた。これほどご高名の先生の死亡記事が新聞各紙に出なかったのも、この故である。その遺文は研究者として最後の最後まで探究心を途切らせまいとする心情が溢れていて頭が下がるが、同時に一学生としては、それを完遂できなかった先生の無念と苦悩とを思つて切ない気持ちにもなった。それゆえここにその遺文の一部を紹介し、先生の思いを伝え残しておきたい。

「私は少なくとも来年、2010年までは生きるべく、欲を出して2011年の辛亥革命100周年まで生き延びて、盛大であろう国際学術討論会に参加すべく、それまでに表題“魂の叫び一日中憲政と孫文の最終来日”の著書を出版すべく、努力を重ねております。体調は日々低下中とも言えますので、著作は“寿命との戦い”とも言えましょう。・・・実は、何年前に、孫文（1925・3・12逝去）と私（1922・7・24出生）とは“同時代人”であり、“同病の癌患者（孫文は肝臓癌、私は胃癌）”であることに思い至って感銘を覚えるということがあり、この1922-25年の4年間の孫文の“苦闘”を解明しようと思ひ立ったのでした。・・・昨年末までに、どうやらく民国日報・上海版の「掲載記事題目抜粋年次」>“一覧表”の作成が完了しましたので、本年2009年元旦を以って著作執筆の出発点として、

編別構成のプランを立ててみましたが、本年7月に早番の“米寿”の集いを開いて下さるとのことで、それまでに良く練り上げて発表させて頂くことにしました。(以下略)

結局、ここで言う米寿の会は盛会裏に行われたが、幹事の久保田文次・笠原十九司両氏が先生のご様子を見て無理をさせないよう配慮したのでお話はなかった。しかしご出席そのものがご無理だったようで、それ以降病勢が悪化し卒然と亡くなられたのであった。

振り返れば、私が東京教育大学東洋史学科に入学した当時(1957年)、助手だった先生が教室と図書室を雑巾がけしたり学生にまでお茶汲みをしてくださったりし、また、毎年恒例となった新入生歓迎ソフトボール大会にもかならず参加して一緒に遊んでくださったりした若々しいお姿は、以後の私の教師理想像ともなった。助手だから授業はなかったが、院生時代には中国共産党初期の機関誌『響導』『新青年』の読書会を主催なさって、院生を直接ご指導なさった。優しい態度と言葉ながら、その批判は容赦のない厳しいもので、劣等生の私などは生意気な口をききながらも、いつ叱られるかとハラハラドキドキしていたものである。これが後に「辛亥革命研究会」と「中国現代史研究会」の嚆矢となった。この二つの研究会には他大学からも若手の研究者が多数参加し、そこから多くの研究者が育っていった。先生ご自身は辛亥革命のみならず民国期初期の議会闘争とか統一戦線など幅広い理論的著述もなさったが、学生たちには口を酸っぱくして資料を読み込んだ実証研究の大切さを強調なさっておられた。そのころはもちろん訪中して档案を読むことなど適わず、それどころか中国人と接触することさえ適わなかった時代だから、そうしたものに対する渴望が、新しい時代の研究者への期待となっていたのかもしれない。それを思うと、いま少し早く日中国交が正常化し研究者の往来や文化交流が今のように活発化していたなら、先生のご研究も一段と高みへと飛翔していたであろうと残念でならない。国交正常化以前に起こった文化大革命は、さまざまな友好団体だけでなく中国研究所をも含む日本人研究者を巻き込んで激しい対立が繰り広げられたが、先生は学究徒として苦々しく感じておられたようで、少なくとも私はそうした右往左往についての先生のご意見を聞くことはなかった。ただ尾崎庄太郎・米沢秀夫さんら草創期のメンバーさえもが研究所から排除されたりする状況を慨嘆されていたことだけが印象に残っている。実証研究の強調もそうした政治状況に振り回されることへの反発の現われだったかもしれない。国交正常化と文革の終焉、そして「改革と開放」はやっと先生の思い描かれていた日中友好・日中交流の発展の端緒となったわけで、先生のお喜びがいかなるものであったかは推して知るべしである。

なお上述の遺文の最後の部分は日中友好のためのご努力と日中友好協会への思いを書かれていたので、その部分は『日中友好新聞』11月20日号に紹介させていただいたので、参照されたい。

【事務報告】

■2010年度総会報告（2010年10月16日）

*総会に先立ち、10月16日に2010-12年度第1回理事会が開催され、佐々木信彰理事長が常任理事会を代表して次期理事長に瀬戸宏会員（摂南大学）を推薦する提案があり、審議の結果、承認された。続いて瀬戸新理事長より、次期常任理事会構成員が提案され、理事会で承認された。一部の空席については、すでに成立した常任理事会に承認を委託した（その後、10月28日までに別掲【役員体制（2010年度-2012年度）】の通り確定し、学会HPに掲載した）。

一、2010年第三回常任理事会議事録

日時 2010年10月16日午前9時半より

場所 中央大学1号館1410会議室

□議題

1. 次期理事長候補者決定

佐々木信彰理事長より瀬戸宏会員（摂南大学）を次期理事長候補者として理事会に諮りたい旨の提案があり、審議の結果承認した。

2. 次期常任理事会構成

理事長以外の次期常任理事会構成員について、候補を確定し理事会に提案することとした。

3. その他

理事選挙当選者について、氏名のみ地域部会別五十音順で理事会・総会で公表し、『現代中国』会務報告、ニューズレターなどには掲載しないことを決定した。

二、2010年度理事会（2008年度-2010年度）議事録

日時 2010年10月16日午前10時より

場所 中央大学1号館1410会議室

佐々木信彰理事長より、多忙の中理事会に出席したことを感謝する旨のあいさつがあった。

□報告事項

A. 会務報告

瀬戸事務局長より以下の報告があり、討議の結果承認した。

1. 経過

（ニューズレター、学会HP掲載事項は省略）

・事業計画の内容はすべて順調に実行され、本年も質の高い学会活動を行うことのできた一年であった。

・常任理事会は学会の日常意思決定機関として機能している。1月、7月の二回の常任理事会は、2010年全国大会開催校が関東であるので、東京で開催した。そのほか、随時常任理事会メーリングリスト、理事会メーリングリストで意見交換した。

・6月20日締め切りで理事選挙をおこなった。(このあと、理事選挙当選者の氏名を口頭で報告)

2. 組織実勢

2010年9月30日現在681名。(昨年同時期666名)

新入会員48名、復会会員2名。退会者35名。計15名の増加。昨年の増加が4名であったのに比べて、会員数の伸びが再び高まっている。

3. 財政状況

・当該年度会費納入会員の割合が、07年66.1%、08年80.3%、09年82.5%、10年85.3%と年々向上している。(毎年9月30日現在)

・しかし会費収入、入会金収入、会誌売り上げ収入がすべて前年度より増加しているにもかかわらず、決算全体としては赤字になっている。(詳細は会計報告参照)赤字の主な原因は、理事選挙があったことと、常任理事会交通費の増加と事務費の増加である。赤字は前年度繰越金から補填されている。

・現中学会の会費は1995年に現在の5000円に改定されて以降、15年間値上げされず、会費の最も安い学会の一つとなっている。会費収入などが増加しても赤字が発生するのは、会費額が現中学会の組織・活動内容と合致しなくなっているのかもしれない。2011年度は、事業報告で述べるように『資料・日本現代中国学会の60年』発行が予定されるので、赤字額は更に増加する。前年度繰越金がまだかなりあるので、学会財政がただちに危機に陥ることはないが、会費改定は、次期理事会が真剣に検討すべき課題になっていると思われる。

B. 会計報告

菅原会計より、会計報告がなされた。(会計報告の内容は、次号『現代中国』に掲載)

会費値上げについて判断すべき時期に来ていることが指摘された。

C. 地域部会報告

関東部会・高見沢磨代表、関西部会・辻美代代表、西日本部会・通山昭治代表より、各地域部会の活動報告があった。

D. 編集委員会報告

山本真編集委員長より『現代中国』84号を刊行した旨報告があった。

E. 広報委員会報告

加茂具樹編集委員長より、学会HP、ニューズレターとも順調に管理・発行された旨報告があった。

F. その他

特に報告はなかった。

□審議事項

A. 新入会員承認

14名の新入会員の入会が承認された。入会処理を迅速に行うために、今後は常任理事会で

も入会承認を行うことを決定した。

B. 事業計画案

瀬戸事務局長より下記の事業計画案が提案され、討議の結果決定した。

1. 来年度全国大会

会場校は近畿大学、開催日時は2010年10月15日、16日（第三土、日曜）とする。

（近年は日本中国学会が第二土・日、アジア政経学会が第四土・日曜の日程が定着している。）福家道信理事（近畿大学）を中心に実行委員会を組織する。

2. 編集・広報活動

・『現代中国』85号を編集、発行する。具体的内容は編集委員会に一任する。

・広報委員会が中心になり、ニューズレターを発行し、学会ホームページの充実に努める。

3. 『資料・日本現代中国学会の60年』発行

・昨年の理事会・総会決定に基づき瀬戸事務局長を中心に編集を進め、原稿は基本的に完成した。A4版で約240ページの原稿。

・現在、顧問、代表幹事・理事長経験者など学会の歴史を知る会員に原稿を見て貰っている。来年3月頃までに刊行し、来年の全国大会などで60周年記念行事を企画する際の参考となるようにする。「学会規約、内規一覧」は、現中學會の内規集の機能を持たせる。資料の制限により、空白部分が相当にあるが、不明部分は不明と明記して刊行し、後日の訂正を待つ。

4. その他、現時点で未定の部分は、常任理事会ML、理事会MLで随時協議する。

C. 予算案

菅原会計より提案があり、総会に提案することを決定した。

D. 各種内規の決定、改訂と確認

事務局長、組織検討委員長より、次の内規について提案があった。

・『現代中国』投稿規定・執筆要領（7月常任理事会で承認、『現代中国』84号に掲載。理事会として追認）

・理事選挙規定（確認、修正、総会に提案）

・名簿貸出規定（確認、整理）

・日本現代中国学会弔意規定（決定）

・日本現代中国学会全国学術大会規程（決定）

・全国学術大会企画委員会規程（決定）

・理事長及びその他の役員選出手続きについての理事会内規（決定）

討議の結果、理事選挙規定は総会決定事項であるため一部修正の上総会に提案することとし、他は一部修正の上承認した。

E. 地域部会新設

東海部会（仮称）の新設について意見を交換した。東海地区所属理事より発言があり、来年をメドに一年間かけて討議・準備することとした。

F. 役員関係

総会に推薦する顧問候補者を確定した

全員留任（近藤邦康、野村浩一、山田敬三、高橋満）

総会に推薦する会計監査候補者について協議した

G. 総会準備

白水紀子理事、田中仁理事を総会議長候補者とすることを決定した。

H. 次期開催校あいさつ

福家道信理事（近畿大学）より、次期開催校あいさつがあった。

G. その他

佐々木理事長より、第三回常任理事会で瀬戸宏会員を次期理事長候補者に決定したとの報告があった。

三、2010-2012 年度第一回理事会議事録

日時 2010 年 10 月 16 日 12 時 20 分より

場所 中央大学 1 号館 1410 会議室

1. 理事長の決定

佐々木信彰理事長より、瀬戸宏会員（摂南大学）を次期理事長に推薦する提案があり、審議の結果、承認した。

2. 常任理事会の構成

瀬戸理事長より、次期常任理事会構成員の提案があり、承認した。一部の空席については、すでに成立した常任理事会に承認を委託した。（その後、10 月 28 日までに別項のように全構成員が確定し、学会HPに掲載した。）

3. その他

特に提案はなかった。

四、2010 年度総会議題

日時 2010 年 10 月 16 日午後 5 時より

場所 中央大学 8 号館 8201 教室

議長に、白水紀子会員（横浜国大）、田中仁会員（大阪大学）を選出した。

佐々木信彰理事長より、開催校である中央大学に感謝する旨のあいさつがあった。

□報告事項

A. 会務報告

瀬戸事務局長より、会務報告があった。（各専門委員会、地域部会報告は事務局長会務報告に一本化。理事会議事録と重複部分は省略）会務報告の中で、理事選挙当選者氏名が総会限りとの前提で、配布物で示された。討議の結果、会務報告を承認した。

B. 決算報告

菅原慶乃会計担当理事より決算報告があった。

C. 会計監査報告

山本恒人会計監査より、不当不正な支出はないとの会計監査報告があった。

討議の結果、決算報告・会計監査報告を承認した。

D. その他

特に提案はなかった。

□審議事項

A. 事業計画案

事務局長より提案があり、討議の結果決定した。(理事会議事録と重複部分は省略)

B. 予算

菅原会計より予算案の提案があり、提案通り決定した。

C. 各種内規の決定、改訂と確認

事務局長より、理事会での討議を経て一部修正した各種内規の提案・報告があった。総会決定事項である理事選挙規定は提案の通り決定し、他は報告を承認した。

D. 役員関係

佐々木信彰(現)理事長より、新理事長選出の報告があった。

瀬戸宏(新)理事長より、就任挨拶と常任理事会構成員の紹介があった。

理事会からの推薦に基づき、近藤邦康、野村浩一、山田敬三、高橋満各会員を顧問に選出した。

会計監査に梁雯会員(東大大学院生)、中川涼司会員(立命館大学)を選出した。

E. 次期開催校あいさつ

福家道信会員より、次期開催校を代表してあいさつがあった。

【役員体制(2010年度-2012年度)】

■常任理事会

2010年10月16日理事会で決定、確認。

理事長：瀬戸宏(摂南大学)

副理事長：高見沢磨(東京大学)

事務局長：辻美代(流通科学大学)

関東部会代表：趙宏偉(法政大学)

関西部会代表：日野みどり(金城学院大学)

西日本部会代表：通山昭治(九州国際大学)

編集委員長：巖善平(桃山学院大学)

広報委員長：辻美代(兼任*)

(以上で常任理事会を構成、以下常任理事会オブザーバー)

企画：大西広（京都大学）

会計：北川秀樹（龍谷大学）

開催校代表：福家道信（近畿大学）

ニューズレター編集：大澤武司（熊本学園大学）

ホームページ管理：王雪萍（東京大学）

*規約上広報委員長は理事でなければならないが、今回のニューズレター編集、ホームページ管理はいずれも理事ではないので、事務局長が広報委員長を兼ねる。

■理事（ニューズレター第31号で紹介済みのため省略）

■編集委員会

編集委員長：巖善平（桃山学院大学）

副委員長：山本真（筑波大学）

編集委員：青山瑠妙（早稲田大学）、滝田豪（京都産業大学）、王京濱（大阪産業大学）、梶谷懐（神戸大学）、奥村哲（首都大学東京）、田中仁（大阪大学）、佐藤普美子（駒沢大学）、楊曉文（名古屋大学）、小川利康（早稲田大学）

■地方部会

□関東部会事務局

副理事長：高見澤磨（東京大学）

代表：趙宏偉（法政大学）

総務：中村元哉（津田塾大学）

事務局：阿古智子（早稲田大学）、佐藤普美子（駒沢大学）、丸川知雄（東京大学）

□関西部会事務局

代表：日野みどり（金城学院大学）

総務：松村嘉久（阪南大学）

事務局：宇野木洋（立命館大学）、田中仁（大阪大学）、福家道信（近畿大学）、内田尚孝（淑徳大学※2011年度から活動）

□西日本部会事務局

代表：通山昭治（九州国際大学）

総務：松岡純子（長崎県立大学）

事務局：岩佐昌暲（熊本学園大学）、小竹一彰（久留米大学）、新谷秀明（西南学院大学）

■会計監査

梁雯（東京大学大学院生）、中川涼司（立命館大学）

■顧問

近藤邦康、高橋満、野村浩一、山田敬三

【日本現代中国学会事務局あて寄贈図書・雑誌】

■石塚迅、中村元哉、山本真編著

『憲政と近現代中国—国家、社会、個人』現代人文社、2010年11月

■大学共同利用機関法人人間文化研究機構

『人間文化研究機構イスラーム地域研究推進事業 実績評価報告書』2010年11月

■虞萍著『冰心研究—女性・死・結婚—』汲古書院、2010年12月

■アジア経済研究所『アジア経済』2010年12月号まで

■社団法人中国研究所『中国研究月報』2010年12月号

【地域部会活動報告】

■日本現代中国学会関東部会研究会

関東部会研究会を開始しました。

〔日時〕2010年12月4日（土）14:30-17:00

〔会場〕法政大学市ヶ谷校舎58年館2階・キャリア情報ルーム

〔テーマ〕劉曉波「現象」をめぐる論争（司会：中村元哉会員）

・企画趣旨説明 関東部会代表理事・趙宏偉会員

・第一報告 坂元ひろ子会員（一橋大学）

「中国知識人としての「劉曉波」とどう向き合えるか」

・第二報告 代田智明会員（東京大学）

「六四天安門事件と劉曉波」

・第三報告 及川淳子会員（法政大学）

「劉曉波『現象』と政治体制改革をめぐる言論空間」

【2010年度学会スケジュール（予告）】

■関東部会春季修士論文報告会

日時：2011年5月7日（土）13時～17時

場所：法政大学 市ヶ谷校舎58年館2階・キャリア情報ルーム

報告者：5名前後（予定） *終了後に関東部会理事会の開催を予定しています。

■2011 年度関西西部会大会

日時：2011 年 6 月 4 日（土）

場所：摂南大学大阪センター（大阪市北区梅田 3-4-5 毎日インテシオ 3F）

報告者の公募など詳細については、随時学会ホームページなどで通知する予定です。

=====

日本現代中国学会事務局

〒166-8532 東京都杉並区和田 3-30-22

大学生協学会支援センター内 日本現代中国学会事務局

TEL：03-5307-1175 FAX：03-5307-1196

genchu@univcoop.or.jp

郵便振替：東京 00190-6-155984

広報委員長：辻美代（流通科学大学）

ニューズレター編集：大澤武司（熊本学園大学）

日本現代中国学会 HP：<http://wwwsoc.nii.ac.jp/jamcs/index.html>